

	はじめて字が読 めた時期	はじめて字が 書けた時期
N	70人	70人
\bar{X}	37.8 か月	43.3 か月
σ	9.89か月	8.31か月
70%	43.7 か月	48.5 か月
最 早	14か月	24か月
最 遅	65か月	70か月

幼児の性格教育

(問題点調査)

青山学院大学

佐藤 良吉

目的
幼児(五歳児)と児童(小学一、二学年)の主として性的態度の問題点を調査し、その結果を小学校教育との関連のなかで性格教育の観点から考察する。

調査方法

質問紙法による。性的態度六十項目を記した調査用紙に保護者

れも六歳以前である。はじめて読めた字は、「の」の字が多い。

五、天才級幼児の性格の特徴と指導上の問題

天才級の幼児の性格の特徴をさらべた結果、あかるさ、正確さ、強さ、もろさ、が特にめだち、そのほかに、態度の不活潑性も認められた。(次表省略)
天才級の幼児について両親が指導上特に困った点を調査した結果は、表(略)のようである。

小 項 目	幼 5 才 児			小 1 学 年			小 2 学 年		
	男 (%)	女 (%)	男女平均	男 (%)	女 (%)	男女平均	男 (%)	女 (%)	男女平均
社会的適応性欠除 内は人消し受口自安活 にみり動が信定撥 かしご重なな 気みり的的のいいい	29	29	29	36	32	34	30	26	28
	32	35	33	31	26	33	34	35	34
	12	12	12	7	14	10	10	8	9
	34	32	33	32	27	29	35	34	34
	26	30	28	20	19	19	21	17	19
	17	17	17	15	26	20	20	20	20
	32	27	29	31	40	35	28	31	29
	16	15	15	11	23	17	19	16	17
	18	9	23	19	14	16	20	20	20
	20	28	24	32	26	29	32	24	28

と担任教師が該当するものを選んで
○印をつける。

調査対象

幼稚園五歳児

男 一三三名
女二二四名合計
二五七名

小学校一学年

男 一四一名
女一八四名合計
三二五名

同 二学年

男 一四四名
女一六七名合計
三一〇名

(東京都内五校一、二
学年共、男子校一校、女
子校二校、共学校二校)

合計 男、四一七
名 女、四七五名

(総計 八九二名)

調査期間 昭和三十年九月—十

月、

結果の処理

学年、性別ごとに小項目を百分比で示し、さらにつきの七つの大項目に分類し、大体の傾向がわかるようにした。

- (A) 適応性(社会的態度)・(B) 神経質・(C) 自己中心性・(D) 自己顕示・(E) 退行性・(F) 興奮性・(G) 拒否性
結果の考察

(A) 適応性(社会的態度)

調査結果からつぎの諸点があきらかにされた。

- (1) 調査対象の差異、記入者の別によらず問題点における百分比がほぼ一致してあらわれた。

このうちとくに百分比の高いものに、内気、はにかみ、消極的、口がおもいなどがあり、学年、性別、調査校別などによらず、ほとんど三十パーセントをこえ、二十パーセント台のものに、しりこみ、受け身、自信がない、不活潑などがあげられる。この調査結果はかなり一般的傾向をあらわしていると思うから、ふつうこの時期の子供の約三十パーセントが何らかの不適応傾向におちいっていると推定される。

(2) 年齢差による著しいひらきのあらわれないのは、この時期がこれらの問題に対して共通した地盤に立つていることによるものと思われる。

(3) 多数の子供にこの傾向が一般性をもっているということは、この時期に適応能力が漸く形成されつゝあり、その形成の途上にある為その力は未だ甚だ弱く、したがって不安定的、動揺的であることが特徴的で、性格形成に及ぼす外的条件の支配、規定が著しい。未成熟な適応力と、支配的エレメントとなる環境条件との間に、確乎たるよりどころをもたない状態で動揺しているのである。この点は性格の形成の初期段階における一樣態でより性格教育上看過出来ない点である。

- (4) 右の事情は調査結果の百分比の高さの著しさを肯定させし

てこの両者が表裏の関係にありということまたはまた保育方法及び教育の形態にかなり基礎的な示唆を与える。つまり幼稚園及び小学校初期の教育が、この時期における以上の特殊性を十分考慮し、のぞましい性格形成の為にその保育方法、教育形態を能う限り右の諸点を配慮の上構成されなければならないということである。殊に現在の小学校初期二カ年間の教育方法及び形態のなかにその工夫の必要を感じる。特に入学初期においては幼児の自由保育の原則と同じく、規制的、訓練的、拘束的、固定的、命令的諸場面のきびしさはなるべくさげ、生活場面を活動的、流動的に構成し子供の生活への順応をなだらかにしてやるとともに積極的に適応能力の促進を助成することを旨とせねばならない。このことは入学当初に限らず小学校一、二年の基本的方向でなければならないが、集団場面における交友との結びつき、教師との関係、与えられる課題との適切さなど、そこにはたらくダイナミックスが子供を安定の方向にむかつて全体のなかでの位置づけを与えるものでなければならない。

(5) 適応能力の弱さは、幼児及び児童の現在における心理的、生活的位置づけを決定するばかりでなく、それが放置され後々までそのまゝ持ちこたせられると、その悪傾向は次第に定着化する。そして新しい生活場面、学習場面への適応を困難にし、その後の順調な発達を阻害する。それは集団生活、学校生活での能動的、積極的な課題へのはたらかけの弱さとしてもあらわれ、万事に消極的、ひかえ目となり、集団生活、学校生活の十分な享有を甚だ困難にする。この調査は、そうした子供の多数いることを示している。なお一がいにはいえないが学級社会での不適応が原因となって生活や課題への興味を失い、心配しすぎ、緊張しすぎということ、学習が十分行われず、知能が高くても学力が上らないということがある。

子供の幸福な生活をつくり、それぞれの個有の能力を十分に發揮するために柔軟でゆたかな社会的適応が不可欠の条件となるからこの点からも性格教育の重要さは強調されなければならない。

(6) 適応力の弱い子供、又はすでに問題をもっている子供を、すでに述べた事柄への配慮なしに、いきなり集団生活の中に投入することは、又は現に生活させられつゝあることはさげなければならぬ。

これらの子供には一般にはゆるやかな生活環境を用意しそこで生活させてやる必要がある。プレー・セラピーやグループ・セラピーの原理を十分導入し集団生活場面への適応をなだらかにしてやる工夫を施すか、もしくは日常の保育形態、教育方法にグループ・ダイナミックスの原理がはたらくように工夫し、そうした教育形態、教育方法のなかで性格の順調な形成と調整とが行われる条件を用意する必要がある。この考え方は幼稚園教育の形態と方法の中には勿論、小学校一、二学年の教育形態にも積極的にとりいれられなければならない。適応性欠除の傾向は他のいろいろな諸条件との交錯の中で形づくられるものではあるが、適応力の未成熟の早期に集団生活にいち早く参加しなければならぬという現在の教育事情の中にその一つの大きな原因を持つものと思われるからこの点について十分配慮の必要を感じるのである。

(7) 適応力欠除の問題はこのようにいろいろな問題と結びつきその及ぼす影響も大きく後々まで多くの心配をのこし易い。又そのまゝ、放置されていると漸次その傾向が持続的定着化の傾向の強いものであるから、その予防と補正が適切でなければならぬ。つまり幼児期及び児童初期においてははなるべく問題をにつくらぬ配慮を第一とし何らかの事情ですでに形づくられたものに対してはいち早く適切

な補正の処置が必要である。この頃はすでにいったように問題のつくり易い事情が外的条件としてもまた子供自身の中にも多くある時代であるからこの点に対する配慮はとくに重要であろう。幼児期

は予防措置が重んじられ児童初期は予防と補正の時期にあてることが適切ではあるまいか。この時代を経過すると三年以後の性格上の著しい基本的特徴として傾向づけられるからである。

(B) 神経質的傾向

(1) 都会の子供にとりわけ神経質的傾向が著しいといわれる。その原因は多様であろうが、この調査では、多数の子供に神経質的傾向のあらわれていることを示す。

刺戟に敏感、心配しすぎ、あきっぱいは二十パーセントから三十パーセント、いらいらする、ねつきが悪い、どもり、せきばらいなどのくせが何れも十パーセント前後となっている。

(2) 神経質傾向の著しい

項目	幼 5 才 児			小 1 学 年			小 2 学 年		
	男(%)	女(%)	男女平均	男(%)	女(%)	男女平均	男(%)	女(%)	男女平均
神経質的傾向	10	13	11	22	19	20	16	20	18
	6	5	5	8	9	8	8	9	8
	27	26	26	20	28	24	34	29	31
	18	17	17	17	22	19	24	21	22
	29	31	30	44	39	41	57	32	44
	20	25	22	20	40	30	41	27	34
	6	10	8	9	13	11	11	13	12
	9	10	9	10	6	8	7	7	10
	35	24	29	29	37	33	43	21	32
	30	30	30	32	36	34	36	23	29
24	16	20	29	14	21	22	16	19	
15	16	15	19	22	20	16	16	16	

